



「帝国日本の気象観測ネットワーク IV 樺太庁」

山本晴彦 著

農林統計出版 2017年7月

377ページ, 4,000円 (本体価格)

ISBN 978-4-89732-367-1

本書は、帝国日本の気象観測ネットワークとして戦前の日本の気象観測の状況をまとめた満洲・関東州、陸軍気象部、水路部・海軍気象部に次ぐ第4巻目の著書である。

本書は基本的に日露戦争以降の南樺太での気象観測の内容となっている。明治以降の日本の領土は国際情勢に沿ってさまざまな変遷があった。日露戦争にともなって中央気象台は軍政下の樺太に臨時観測所を開設したが、ポーツマス条約後に樺太庁が設置されたことにより、官制上は中央気象台ではなく樺太庁が各地の測候所での観測を行った。ところが1943(昭和18)年以降は樺太は内地に編入されたため、中央気象台の配下となった。本書は、そして終戦を迎えるまでの約40年間にわたって南樺太での気象観測の状況を一つ一つ網羅しようという入念な調査となっている。南樺太は現在は日本領でない地域であり、当時の観測状況やその経緯に関する資料は多くなく、本書はそれを発掘して調査を行った学術的に貴重な資料である。構成は以下のようになっている。

序章 課題と方法

第1章 樺太における気象観測の創始

1. 樺太と千島の領有と気象観測
2. 臨時観測所の開設
3. 第十臨時観測所の開設
4. 樺太庁測候所への改称

第2章 樺太庁観測所の気象業務と展開

1. 樺太庁観測所における気象業務の概要
2. 樺太庁観測所における職員と予算
3. 企画院気象協議会による気象機関の整備拡充
4. 樺太庁の気象観測機関

第3章 樺太庁観測所・樺太庁気象台の職員

1. 歴代所長・台長
2. 職員の構成
3. おもな職員

第4章 樺太の気象資料

1. 気象年報
2. 気象月報・気象旬報
3. 気象累年報
4. 上層気流観測報告
5. 観測所案内・観象便覧
6. 学術誌
7. 異常気象報告・特別気象報告

8. 気象に関する資料

9. 地震に関する資料

第5章 薩哈噠軍政部と亜港観測所

1. シベリア出兵と尼港事件
2. 薩哈噠軍政部
3. 亜港観測所の設立と展開
4. 亜港観測所における気象観測記録
5. ツイモフ農事試験場における気象観測
6. デカストリー港(泥港)の気象調査
7. 『北樺太及び北辺気象の一斑』

第6章 終戦時の樺太地方気象台

1. 回想録にみる終戦時における樺太地方気象台
2. 職員の引き揚げとその後の活躍
3. 終戦時における樺太・千島の気象官署の気象通報

終章

1. 『樺太気象台 沿革誌』
2. 『サハリンの気象』
3. 『大泊測候所の沿革とその記録からみた大泊の気象』

南樺太といってもなじみのない方がほとんどであろうから簡単に説明しておく。北緯50度以南の樺太が対象となっており、その面積は3.6万 km²と北海道の半分ほどの広さがある。日露戦争後、各観測所・測候所を統括する本所機能として、樺太南部の港町である大泊に樺太庁測候所が置かれたが、1941(昭和16)年に大泊の約40 km 北方の豊原に樺太庁気象台が開設されて本所機能はそちらに移った。樺太庁気象台は1943(昭和18)年からは中央気象台の樺太地方気象台となり、終戦を迎えることとなる。期間に違いはあるが軍や簡易観測所を含めると38地点で気象観測が行われた。

本書の内容は、当時の各測候所の位置、観測手法などの変遷や観測結果とその評価が豊富な写真や原図で、そして終戦時の混乱の様子が収録されている。また、官制や職員の待遇をも含む気象観測体制や終戦後の職員の処遇なども記されている。さらに当時の樺太

でのさまざまな気象観測記録の目録としての価値もあり、当時の状況や記録を知る上での貴重な資料となっている。

また、この本の中にはロシアやソビエト連邦との国境の変遷や尼港事件などに関連した日本の外交史も垣間見える。本書には当時の職員や関連する方々の多くの聴き取りや回想記が掲載されており、当時の観測をめぐるさまざまな状況や日常生活、終戦時の混乱、苦勞などの生の声が収録されている。現在から見て当時

の暮らしや観測状況を推測することは非常に困難だが、それを知る手がかりにもなっており、貴重なドキュメンタリー的な側面もある。

当時の南樺太での気象観測状況をまとめた資料は他にないと思われ、当時の気象観測の状況を理解するための貴重な資料となっている。この本をきっかけとしてさらに当時の樺太での観測状況や気候が解明されていくことを望みたい。

(気象庁気象研究所 堤 之智)